【共同研究報告】

人は身近な「死者」から何を学ぶか

――阪神大震災における「友人の死の経験」の語りより――

やまだようこ・河原紀子・藤野友紀・小原佳代・田垣正晋・藤田志穂・堀川学

……けれど私にはわかる
心に浮かぶ像がわたしを慰めるのが
そして悲しみの中にふたたび力が生まれるのが。（テニスン）

Ⅰ　問題

死の経験は、一般論で論じることはできない。「人が死ぬこと」を知識として知っていても、それは「死」を実感し経験したうえで生まれる「生きた知恵」とはほど遠い。

柳田（1998）は、死を20年間取材した体験と、息子の死に直面した体験の違いについて、次のように述べている。「やっぱりどうしようもないセンチメントの部分から逃げられないところが出てきた。とくに洋二郎が脳死状態に陥ってから、僕は洋二郎の体と毎日会話をしていましたが、そういう行為は、科学的な発想をする医者から見ると、非科学的で馬鹿げているといわれるでしょうが……」「科学では仕切れないものを人間はもっている。それがいのちの精神性の側面であったり、『二人称』という人間の関係性のなかでのいのち。いのちというのは、その人固有の生物的な命だけじゃなくて、生活や人生を共にした関係性のなかでのいのちという側面も持っている。」

「生」も「死」も、それだけ切り離して論じられるものではなく、背景となる文脈（context）を含めた「関係性のなかでの生と死」である。死の経験は、それまでの人生（life）の関係性のなかで起こり、関係性を変容させ、生（life）を変え、人生の物語（life　story）を変えていくであろう。

死の経験は、「誰の死か」という関係性の観点から少なくとも３つに分けて考える必要がある。第１は、当事者にとっての死、つまり「私の死」として経験される「一人称的死」である。第２は、愛着対象、親密な人、身近な人の死であり、「かけがえのない、あなたの死」として経験される「二人称的死」である。第３は、「他者の死」や「死一般」として経験される「三人称的死」である。

本研究が焦点をあてるのは、二人称的関係性のなかでの「友人の死」による喪失経験である。この面で先駆的研究を行ったのは、フロイト（Freud,S.）である。彼は、『悲哀とメランコリー』で、対象喪失の体験を「喪の作業」（mourning work）として概念化した。そして、リビドーの対象を客観的、知的に失っているにもかかわらず、情緒的にその対象に関する表象にカセクシス（備給）を向け続けることによって生じる心的苦痛を、悲哀と定義した。彼によれば、喪の作業の目的は、喪失した対象に対して、心から断念すること、つまり、カセクシスを除去して離脱（detachment）し、別の新しい対象にリビドーを向け変えることである。

フロイト以後、愛着（attachment）対象の喪失（二人称的死）を心的外傷として扱ったボウルビィ（Bowlby,J.）やパークス（Parks,C.M.）、死に行く末期患者がどのように死を受容するか（一人称的死）を扱ったキュブラー・ロス（Kubler-Ross,E.）らも、基本的には同じ方向で喪失を扱ってきた。つまり喪失をマイナス体験とみなし、喪の作業の終局を、断念や離脱による死の受容や心的外傷の回復においた。彼らの研究は、カウンセリングや看護やリハビリテーション等に影響を与えたが、やはり、いかに悲嘆を脱し、苦痛を防ぎ、現状復帰するかが目ざされてきた。このように喪の作業は、負の体験を受容し、癒し、回復する過程として位置づけられてきた（Macnab,1989）。

しかし、喪失は、常にマイナスの経験だろうか。確かに「二人称的死」は、劇的な喪失体験であり、人生に危機をもたらす出来事（critical life event）である。だが、生涯発達的にみれば危機は、生の意味が問われ、生活が再構造化され、人生を変容させ、成熟をもたらす発達の契機にもなるのではないだろうか。

やまだ（1995b）が提案してきた「生涯発達における喪失の意義」という観点から見るならば、「死」は単なる喪失ではなく、人はその経験から人生において重要なものを学ぶ。また、死者との関係性は死後もつづくと考えられる（やまだ，1997b）。今までの研究はおもに悲嘆による病理現象をもたらす臨床事例に基づき、医療の立場からなされてきた。ふつうの人々が、身近な人々の死からどのように素早く立ち直り、死から何を学んでいくかという人間の健康な側面は無視されすぎてきたといえよう。

そこで本研究では、「生涯発達における喪失の意義」という観点から、短期的にみた喪失からの回復のみではなく、長期的な時間軸からみる。心的外傷の回復だけならば、正常な生活に復帰した時点で終わりである。しかし、「死」の経験を生涯発達的にみるならば、その後の長期にわたる変化プロセス、内面化や意味づけや自己の生活史（life history）への組み込みプロセスこそ重要である。

私たちは日常、「時間が癒してくれる」「時間をおく」「ねかせておく」という言葉で、喪失に現実的に対処している。しかし、ここで「時間」といわれている中身は何だろうか。ただ単に物理的時間が過ぎればよいということではないだろう。時間をおくことによって、心理的に何が起こるのかを見ていかなければならない。森（1978）がいうように、「経験」は、刻々の「体験」

とは区別される。経験とは、時間のなかでの結晶化作業、時間を経て自分の中で出来事を再構成する作業である。「その時すべての映像は時の堆積を重く帯び、本当に人を養うことができるようになる。そしてこの堆積が限りなく発酵を重ね、その内側から、時の流れに抵抗する重味が生じてくる時、それは結晶して、時を超える形を獲ようとする。」山住（1997）も指摘するように、喪の作業は、一過性の回復作業ではなく、長い時間のなかで行われる人生の物語（life story)の変容・再構成プロセスの一環として重要な意味をもつ。

本研究で、青年期後期の人々の「友人の死」をとりあげるのは、以下の理由からである。発達的にみて、大人への「移行期」にあたる時期は、「死」についての感受性も鋭敏で発達の契機となりやすい。青年期後期では、将来に就職や結婚というライフイベントを控え、社会的な地位や役割はまだ確立していない。人間は、過去や現在だけではなく、未来展望をもち、想定世界（as sumptive world）や可能世界（possible worlds: Bruner, 1986）に生きる存在である。青年期の同世代の友人は、同じような将来を展望し、同時代を共にしながら人生という長い旅にでる存在である。プラース（Plath,D.W.）は、長いかかわりをもち、共に人生を歩む道づれ、ライフコースの歩みを見とどけあう同伴者をコンボイ（護送艦）と名づけているが、青年期の友人は消息や生き方を確認しあうコンボイとなる可能性が高い。

本研究の対象は阪神・淡路大震災（以下震災と省略）によって友人を失った青年である。震災における身近な人の「死」は、以下のような特徴をもつであろう。①予期せぬ出来事であったために、「死」を覚悟する準備期間がなかった、②その人が死ぬ必然性は全くなく、むしろ自分が死ぬ可能性もあった、③震災による日常生活の崩壊とともに体験された、④個別のプライベートな「死」という側面と、共同体全体として取り組む必然性をもつ劇的でパブリックな「死」という側面を併せ持つ。

彼らは、突然の災害で、未来があり、同世代として人生を同伴するはずであった友人を突然失ったわけである。彼らは、戦地で友人を亡くし生き残った「戦友世代」と同様に、「あの時点」を境に友人と生死を分けたという意識をもちやすい。震災という歴史・社会的事件と、個人的出来事が重なっているため、「友人の喪失」経験が個人の想い出だけに閉じず、仲間と共有されやすく、社会的・歴史的イベントとして記憶されやすく、生涯発達的意義も生じやすいと考えられる。

方法論的には本研究では、『現場（フィールド）心理学の発想』（やまだ，1997a）にもとづき、まず、実際の彼らの語りに耳を傾けることから始める。死別体験が肯定的意義をもち、教育機能をもつことを指摘するだけではなく、どのような過程で何が行われるのか、ダイナミックな変化プロセスをていねいに調べることが必要である。このようなデリケートな問題を深く知るには、表面的な情報を質問紙調査で一律に調べるよりも、少数事例であっても生の語り（narratives）を注意深く聞き取っていく質的データのほうが有効であろう（やまだ，1995a)。語ること自体がトラウマにならないよう慎重な配慮が必要であるが、語りの自覚的コントロール能力という観点からも、青年期後期の人々を対象とした。

本研究は探索的なものであるが、以上のような問題意識から「二人称的関係性のなかでの友人の死」「生涯発達における喪失の意義」「経験を人生物語へ組み込む変化プロセスの重視」「長期の時間軸の設定」「方法論としての語りと事例の重視」という斬新な観点からのアプローチを試みる。

具体的には、本人の「語り」をもとに、青年期後期の人々が震災における友人の「死」をどのように経験したのか、そのダイナミックな変化プロセスを、次の３観点から調べることを目的とする。（１）「死」の前の死者との関係性（出会い、親密さ、心理的な距離、死の前に何を共有していたかなど)。（２）「死」を知ったときの状況と短期的変化（死の直前・直後の行動、通夜・葬儀、その後１，２か月の心情や行動など）（３）自分のなかに起こった「死」の受容と死者との関係性の長期的変化プロセス（「死」後から時間をへるにつれて、どのような納得のしくみが生じ、どのような変化が生じたか。人生観や死生観の変容、現在の死者との関係のありかたなど)。

II　方法

１．予備調査

（１）予備インタビュー①

調査者たちが、自分の身近な人３２人の「死」の経験について記述、討論し、「死」の経験において特徴的な出来事について予備知識を得た。

（２）予備インタビュー②

１０代から３０代の青年７人に対して、身近な人の「死」の経験についてインタビューを行い、調査のしかた、相手の気持の配慮のしかたなど具体的に訓練した。

（３）震災追悼文集の収集と分析

インタビューの予備知識を得、インタビュー資料をより広範囲の資料で補足するために、震災で亡くなった友人についての追悼文集と体験手記を収集、分析した。収集対象は、死者と執筆者の年齢が１０～２０代、内訳は、死者・執筆者とも中学生７４人、高校生５５人、大学生４６人であった。

２．本調査

（１）インタビューの実施方法

震災によって友人を亡くした当時大学生であった２０歳代の青年（いずれも仮名)、木田さん(26歳、男、大学院生、震災時神戸市在、現在神戸市在、友人は川野さん、女)、林田さん（26歳、男、会社員、震災時奈良県在、現在千葉県在、友人は浜野さん、男)、森田さん（25歳、女、大学院生、震災時大阪府在、現在神戸市在、友人は海野さん、男）の３名の語りを分析した。知人を介して自発的に研究協力してくれる人を捜し、依頼文を送付して具体的な手順を説明し了承を得て、1998年７月下旬から８月上旬に１人につき１回、約２時間のインタビューを行った。実施

の際には、フェイスシートとインタビュー用紙を使用した（項目の詳細は下記参照）。また、インタビューの内容は、語り手の許可を得てテープレコーダーで録音した。

［フェイスシートの内容］語り手の年齢、性別、身分・職業、最終学校、出身地（主に育ったところ）、現在の居住地、震災時の居住地、震災が起きたときの身分、現在の家族形態、震災時の家族形態など。

［インタビューの観点］実際のインタビューでは、辛い思い出や心情にふれることを十分に配慮し、語りたいことだけで良いことを確認し、自発性を尊重した。会話の自然の流れで自由に語ってもらったが、（1）「死」の前の死者との関係性、（2）「死」を知ったときの状況と短期的変化、（3）自分のなかに起こった「死」の受容と死者との関係性の長期的変化プロセス、については必ず聞くように留意した。

Ⅲ　結果と考察

1．インタビューの分析法

録音した会話プロトコルを逐語記述し、次の観点から分析した。生者と死者の関係の変化プロセスを、現在（震災後3年半）の時点において行われた生者の語りをもとに、次の区分によって整理した。

まず、予備調査および本調査から、一般的にみられる「共通変化プロセスの区分」として、図1～3の上部のように、大きく3段階に区切った。それは、Ⅰ「生前の長期的変化プロセス」、Ⅱ「死の前後の短期的変化プロセス」、Ⅲ「死後の長期的変化プロセス」である。さらに、「共通変化プロセスの区分」の下位分類を行った。Ⅰにおいては「1　生前の関係」、Ⅱにおいては「2　死を知る直前」「3　死を知った直後」「4　通夜・葬式」「5　死後1、2か月間」、Ⅲにおいては「6　その後長期の関係」を設定した。

次に、各語り手の語りの個別性と独自性を尊重し、「個別変化プロセスの区分」を行った。それは図1～3の下部のように「語られた経験のまとめ」「語られた行動」「語り口の具体例」を併記してまとめた。

2．木田さんの語りの分析（図1参照）

Ⅰ　「生前の長期的変化プロセス」

川野さんは、同じ大学の同学年で同学科の同級生（当時4回生・異性）であり、下宿組の同級生たちは、卒論執筆という名目で、頻繁に下宿や大学の研究室で集まっていた。1対1の個人的な関係というよりは同じ学科の同輩グループに属している一員同士で対等な関係であったと言える。

図1　木田さんの語りの分析

共通変化プロセスの区分	Ⅰ.生前の長期的変化プロセス		Ⅱ.死の前後の短期的変化プロセス				
	1．生前の関係		2．死を知る直前		3．死を知った直後	4．通夜・葬式	5．死後1、2か月
個別変化プロセスの区分	出会い	4回生	震災当日の日中	震災当日の夜	震災の次の日	通夜・葬式	葬式から2日後
語られた経験のまとめ	〈同じ学科の同輩グループ〉		〈予感〉		〈実感なし〉		〈悶々とした日々〉
語られた行動	大学の専門課程へ移行する2回生の後期に出会う。	川野さんは、4回生下宿組の一員で、毎日のようにいっしょに過ごす。	川野さんの下宿のある場所へ歩いて行く。	17日の夜、友だちの家にみんなで集まる。	友人から電話で知らせをもらう。自分も電話で友人に連絡。	通夜・葬式に参列のため、川野さんの実家を訪れる。	心のケアのボランティアに行く。
語り口の具体例	「おとなしい感じの方すね。あんまり、しゃべれへんなあという」	「僕ら4回生で下宿組は仲が良かったんですよ。その地震の直前まで鍋とかようやってまして［後略］」	「2階が1階になってて、もう逃げたんやなと思った、というか思いたかったというか。その時に、もしおったらもうアカンなとその時に思いました。」	「その子だけいないみたいだ、という感じで」	「ほんまに、1日2日前まで一緒に歩いてたり、話してたりをいろいろしてたのに。」		「でもなんか、もんもんとして、やってたんです。」
備考	週に何回と頻繁に授業でいっしょ。ゼミは違うが専攻（心理学科）が同じ。	川野さんは教育実習のため、3回生から下宿する。	震災当日、木田さんは、神戸の下宿にいた。木田さん自身も被災者。				

［　］註釈　＊聞き取りが困難だった箇所

図2　林田さんの語りの分析

共通変化プロセスの区分	Ⅰ.生前の長期的変化プロセス							Ⅱ.死の前後の短期的変化プログラム	
	1．生前の関係							2．死を知る直前	3．死を知った直後
個別変化プロセスの区分	入学		1、2回生の時			震災前夜		震災直後	
語られた経験のまとめ	〈出会い〉		〈始終一緒〉			〈最後の接触〉	〈病が明暗を分ける〉	〈意識朦朧〉	〈信じられない〉
語られた行動	グリークラブの花見で浜野さんが林田さんに気付く。	入学式オリエンテーションで浜野さんが林田さんに声をかける。	浜野さんと一緒にグリークラブに入部。	クラスとクラブで一緒。浜野さんの下宿に泊まる。レポートを共作。一緒に試験勉強。共に「クズグリ」の立場。	クラブのオーディションや試験勉強。	1/15、グリークラブの東京公演会場で浜野さんと別れる。この時林田さんに微熱。	東京から帰宅後インフルエンザで寝込み、自宅療養。	引き続きインフルエンザのため意識が朦朧。	17日午後2時、下宿生部員の安否確認に奔走していた部長からの電話で浜野さんの死を知る。
語り口の具体例		「［第一印象は］ええやつやな」	「一人やったら行きにくいけど［中略］二人やったらいいかあと思って」	「ほとんど始終一緒やった」	「［浜野さんは］要領がすごう良いらしいわ」	「16日の晩に泊まるわとか言ってたんだよ」	「いっつも頑丈なんだけど［中略］突然、インフルエンザかかったんだよ」「病気が、その、命を救ったし［後略］」	「その後も動けなかったね」	「始めジョークかと思った」「その後しばらくずっと信じられなかった」
備考	林田さんが浜野さんの友人に似ていた。	氏名の50音順にクラス分けされるので林田さんと浜野さんは同じクラスの隣同士。		林田さんは自宅から約2時間かけて通学。「クズグリ」とはクズの（熱心でない）グリーマンの略。	キーワード「60点の勉強」	17日は1限目のクラスがある予定だった。			

［　］註釈

			Ⅲ.死後の長期的変化プロセス				
			6．その後長期の関係				
死後1、2か月			卒業	夢での出会い	ときどき思い出す		
〈意志を継ぐ記念の作業〉			〈同輩グループとの別れ〉	〈納得〉	〈接触〉	〈慣例化〉	〈神戸に住む〉
川野さんの卒論を代わりに執筆する作業に友人たちと取り組む。	NHKの取材を受け、テレビで紹介する。		震災直後、卒業でみんなと別れる。	川野さんの夢を見る。	川野さんの住んでいた場所が通学の際に見える、見てしまう。	命日に川野さんの家にみんなで行く。仏壇の前で話をする。	神戸に住み続けている。
ボランティアより「その方が良かった、というか生きがいがあったというかんじですね。」「下宿で見つけた『方法』って2文字しかフロッピーに入ってへん。」 「[卒論] もうちょっと書いとって欲しかった、というのが正直思いましたけど」という思いと「卒論をよくやってへんくってよかった」という思い。	「[他の友人の、亡くなった人には] 有名な人が多かったんで川野さんもいろいろ戯せたろーとか思って、NHK来たとき、よっしゃーとか思ったり。」		「もしかしたら生きてるんちゃうかと思うときありますね。」「まだ3年ちょいだから」	「あの神戸大行きの、そのバスが夢に出てきて、ほんでなぜかわからないんですけど、バスの車体の右半分があの世で、左半分がまあ僕がおるんですよ、ほんで右のいちばん後ろにその子が座ってて、左のいちばん後ろに僕が座ってて、まあいったら隣同士で、ほんで、「天国はどうや」っ的なことを、天国どうやっていうか「天国にも心理学はあるか？」って聞いたら「ある」ってそれしか覚えてないんですけど。」 「それで、なんか自分が＊＊つけて納得できたんかなっていうのはありますけどね。そのバスに、でも二つに別れている、けどもいっしょのバスにのれているというか、[後略]」	「ちょっと、おーって思いますね。」		「まだ神戸から離れられへん、っていうのもなんかあるような気がする。」
微妙な矛盾する思いを示している。	卒論半ばで亡くなったことをテレビで紹介した。		木田さんは4回生で被災。震災後の3月に大学を卒業。	地震に遭う夢は何度も見たが、この夢は1回だけ見た。	友人が亡くなったことを思いだし、感情が込み上げてくることを示す表現。		神戸大を卒業した後も神戸から離れていない。

			Ⅲ.死後の長期的変化プロセス							
4．通夜・葬式		5．死後1、2か月	6．その後、長期の関係							
葬式		震災の1か月後	卒業までの2年間			卒業		現在	継続的に	
〈親密さを認識〉	〈痛烈な喪失感〉	〈死を実感〉	〈喪失感・孤独〉	〈話題を避ける〉	〈思い出して励みにする〉	〈環境の変化〉		〈過去は過去〉	〈墓参り〉	〈毎晩の感謝〉
クラブの団体で参列し、浜野さんの親御さんと生前のことを話す。	焼香後、クラブのみんなで合唱しながら泣く。	全部員が集合しクラブの今後の活動について話し合う。	クラブ内では立場が孤立し、他では始終一緒に行動する人間がいない。	クラブや共通の友人の間では浜野さんのことについて話さない。	3回生の終わり、副部長としてのクラブ運営とソリストとしての練習、そして就職活動をしながら、卒業単位のために試験勉強する。	大学卒業と同時にクラブを引退。就職。	東京勤務。	ショックがなくなり元気になってきた。	年二回浜野さんのお墓を参り、親御さんに会い生前の浜野さんのことを話す。	毎夜、就寝前に浜野さんにも感謝する。
「あいつのことよく知ってるのが[クラブの中で]俺[だけ] だってことが判明した」	「みんな、いないと思って泣いてたね、それが一番、浜野君がいないっていうのが痛烈に分かったね」	「やつの顔がいなかったときはやっぱり、ああ死んだんだ [後略]」	「やっぱおってくれたらすごい良かったのになあって思ったよ」「やっぱりつらかったね」	「向こうが僕のこと気使ってくれるか、どうか知らないけど、やっぱ話題を避けるというか」「クラブの中でもあんまりそういうことについて話さないっていう、暗黙の了解みたいなことがあったからね」	「かれの60点の勉強、ひたすらやって、奇跡が起きてさあ、70単位取れたのよ」「僕が卒業したのは彼のおかげです」	「[生活のサイクルが] ゴロっと変わったから、[喪失感は] なくなったね」	「[震災に対して] 関東の人たちっていうのはさあ、一種のイベント、という感じの意識なんじゃないかと思う」	「なんかすごく、昔のことに感じちゃうねえ」「引きずられるとねえ、駄目だからねえ」	「まあ同じ、ような話だけど、繰り返して、話してあげることによって、ああ、友だちやったんやなって事を、思い出させてあげて」	「[寝る前に] 守ってくれたことに対しては、感謝するってことは、しつけられてるからね」「実際にね、かれのお陰で、大学卒業できたと思ってるし」
			「クズグリ」一人になる。		それまでに、卒業に必要な140単位の内の約半分しか取れていなかった。					クリスチャンの教えを受けた母親の影響。本人はクリスチャンではない。

Ⅱ　「死の前後の短期的変化プロセス」

自身も被災者だが、マンションは倒壊を免れた。震災直後に川野さんの下宿先へ行き、「2階が1階になる」ほどの被害を見て、「もしおったらあかんな」と予感した。震災当日の晩に、友人宅に集まり、「いない」と認識した。震災の翌日、友人から電話で死の知らせを受け、その後、通夜、葬式のため彼女の実家へ向かった。出来事があまりに急すぎて、まだ現実として受け止めきれない、信じられなかった。

葬式から数日後、木田さんと友人らは、震災後に下宿で見つけたフロッピーにわずか2文字しか書かれていなかった川野さんの卒論を執筆する共同作業を開始し、約1か月かけて完成させた。

Ⅲ　「死後の長期的変化プロセス」

震災後の春に大学を卒業し、学生時代の友人とも別れた。震災とほぼ同時期から会っていない友人も多く、川野さんも「もしかしたら生きてるんちゃうか」と思うことがある。現在も神戸に住み、日常生活で川野さんの下宿があった所を見ることがある。毎年、命日には川野さんの実家にみんなで集まる。

震災から1年以内に、1回だけ川野さんの登場する印象に残る夢を見た。それは、あの世とこの世の半分ずつになったバスに2人で乗っていて、木田さんが「天国にも心理学はあるか」と聞くと、川野さんが「ある」と応えた短い会話である。この夢は、木田さんが川野さんの死を「納得」する重要なエピソードであったと考えられる。

3．林田さんの語りの分析（図2参照）

Ⅰ　「生前の長期的変化プロセス」

＜入学＞二人は同じ大学の同クラス、入学式に席順が隣で出会い、同じグリークラブに入部した。〈始終一緒〉二人は終始一緒で、クラブでは少数派の「クズグリ（グリークラブのクズ）」で、浜野さんの下宿によく泊めてもらっていた。〈最後の接触〉震災の2日前、クラブの東京公演の日が最後で、＜病が生死を分ける＞震災前日の晩は浜野さんの下宿に泊まりに行く予定だったが、風邪でやめたので助かった。

Ⅱ　「死の前後の短期的変化プロセス」

死を知る直前は風邪で意識朦朧状態であった。クラブ長から死を知ったが、 始めは冗談のようで実感がなく、その後もしばらく信じられなかった。通夜・葬式で、浜野さんの両親に会い、特別に親密な関係だった唯一の人間だと自覚した。その後、両親と交流を持つようになった。〈痛烈な喪失感〉焼香後、クラブ員で賛美歌を合唱した。その歌の雰囲気に触発されたように、みんなが歌いながら泣いた。

Ⅲ　「死後の長期的変化プロセス」

〈不在を再確認〉震災から約1か月後のクラブの集まりで、浜野さんがいないのを知って死を実感した。〈喪失感・孤独〉浜野さんの死後、大学卒業までの約2年間は、孤独であった。〈話

題を避ける〉クラブでも他の友人たちとも浜野さんの話題を共有することはなかった。〈思い出して励みにする〉浜野さんの勉強法を思いだしそれを励みにして勉強し奇跡的に単位をとった。彼が助けてくれたのだと感謝している。

〈環境の変化〉卒業し就職し、東京勤務と生活が大きく変わり、喪失感はなくなった。〈過去は過去〉今では震災や学生時代のことがすごく昔のことに感じられる。「引きずられるとねえ、駄目だからねえ、…昔のことと思わなかったら、まあ無理だよ、大ショックだったからねえ、神戸の人たちもそう思ってるんじゃないの、…あんときはあのときで、忘れて、忘れちゃいけないことは、あるんだけど、忘れて、がんばらないと、もう、やっていけないよ。」

〈墓参り〉年に2回は墓参り、その折には、浜野さんの両親と会い、生前のことを話して聞かせる。仲間とは話さないが、両親との間では彼のことを積極的に話す。〈毎晩の感謝〉林田さんはクリスチャンの母の影響で、幼い頃から就寝前に感謝する。現在、浜野さんを思い出すのは、毎夜の感謝のときである。

4．森田さんの語りの分析（図3参照）

Ⅰ　「生前の長期的変化プロセス」

二人は、クラブの先輩後輩（異性）で、入学時に海野さんは2回生であった。「よく遊びにいった、おもしろく、やさしく頼れる人」（憧れの先輩）であった。

Ⅱ　「死の前後の短期的変化プロセス」

震災の日、自宅は大阪なので被害は皆無、神戸の仲間のことを心配した。海野さんの死は、翌日の昼電話で知った。信じられなかった。「真っ白・・何かすごく強い人だというイメージがあったので、そんな簡単には亡くならないと思った」その後葬式までの1週間、心理的・身体的に様々な症状が出て〈激しく動揺〉した。葬儀で死を実感して変わった。

Ⅲ　「死後の長期的変化プロセス」

死をタブーにせず、両親やクラブの友達とよく話す。海野さんを〈励みの対象〉にし、目標や行動のモデルにし、前向きになっている。時として泣くこともあり、悲しみが出現する。1年ごとに下宿跡へ行く〈記念の作業の定例化〉。死生観の変化があり、海野さんの死は価値観を変える出来事として深く内面化されている。

5．3人の「友人の死の経験」の語りのまとめと総合考察

図4（72ページ参照）に、3人の「友人の死の経験」の経過をまとめた。生前の関係性においては、木田さんは「同じ学科の同級生」、林田さんは「クラブとクラスの同輩で親友」、森田さんは「同クラブのあこがれの先輩」であった。それぞれの生前の関係性の深さの違いが、その後の短期的変化プロセスと、長期的変化プロセスの差異とにかかわると考えられる。死後の経験のおもな経過は、次の5相に分けられた。

図3　森田さんの語りの分析

共通変化プロセスの区分	I.生前の長期的変化プロセス		II.死の前後の短期的変化プロセス				
	1．生前の関係		2．死を知る直前	3．死を知った直後		4．通夜・葬式	
個別変化プロセスの区分	出会い	海野さんとの日常生活	震災当日の早朝	震災次の日の昼	海野さんの死を知って、遺体に会う(葬式)まで	通夜・葬式	
語られた経験のまとめ	＜憧れの先輩＞		＜仲間への不安＞	＜実感なし＞	＜激しい動揺＞	＜死の実感＞	＜自己の捉え直し＞
語られた行動	クラブで初めて出会う。	クラブ活動と、練習後や休日に遊びにいく。	森田さんが、自宅（大阪）で震災を経験する。	自宅にいて、電話で、海野さんが亡くなったことを聞く。	神戸に行くことができずに自宅、及びその周辺にいる。	お葬式（海野さんの実家）に行き、海野さんの遺体に会う。	海野さんの遺体に会い、考えた。
語り口の具体例	［第一印象は次のとおりであった］「めっちゃいい、なんかおもしろーい人。」 「パワフルだし、すごい優しい人だったよ。［中略］私は彼にとって下級生だったわけだけれども、下級生にも親身に色々接するような、そういう感じやったかな。いい人だったよ、本当に。」	「個人的にやけど、何人かで飲みにいったりとか、あと旅行とかキャンプだとか、夏とかというのもあったりとか、なんかそんな感じかな。」 ［その中でいちばん楽しかったものは］「地震が起こる前にワアって遊びにいって覚えているのが、10月ぐらいかな、姫路セントラルパークだったのね。で、そこでの楽しそうな写真とかをもう何度も何度も繰り返し見たので、その辺りがいちばん印象に残っているのかな。」 「あまりにも、日常生活だったから、そんなにいつここ行ってというのは、よく覚えていないんだけれども［後略］」 「腰を痛めて、そういうことですごく親身になって相談に乗ってくれたのね。なんかそういう一言一言がすごくうれしかった。」	「私自身がどうこうというよりも、知り合いが神戸にたくさんいたということが私にとっては大きかったかな。」	［死を知った時の印象は］「真っ白・・・、なんかすごく強い人だというイメージがあったので、そんな簡単には亡くならないと思った。」 「病院とかにも名前が分からない人とかが担ぎ込まれたりしていたので、絶対その中の一人だろうと思った。」 「でも、実際にね、友達がそうやって搬り起こしたというのを聞くと・・でもやっぱ、現実としては受けとめられなかったな、最初はね。」 「本当に受けとめるっていうか、本当に『あ、この人は亡くなっちゃったんだな』と思ったのはお葬式になってから実際に見てから。」	「神戸に行こうかと思ったんですけれども、［中略］私自身が食べれなかったし、体が動かなかったからお通夜に行こう、と思ってそれまでは大阪にいたんですけれども。」 「気がついたら涙がでているし、うわーって思う時もあればふっと静まるときもある、そういうのの繰り返し、で。」 「怒りようがないんやね、ああいう災害に対しては。」 「で、自分にできることはなんやろ、と思ったときに、あ、献血しよとかさ、とにかくお参り行こ、とか、［中略］結構奇異な行動してたかもしれない。」	「お葬式にいって色々、まあ海野さんにお会いして、でそっからは変わったんかな。」 「実際に［話を共有できる人と］会っていろんな人とまず悲しみを共有できる、というのは大きいよね。」 「本当に受けとめるっていうか、本当に『あ、この人は、亡くなっちゃったんだな』と思ったのは、お葬式にいって、実際に見てから。」	「自分よりもっと辛い、例えば親御さんとかね、ご家族の方とかがすごい辛いというのを思うと、前の方に私自身がちゃんと生きなきゃという風に思い始めてからは、そういう抑鬱的な、訳も分からず落ち込んだりということもなくなってきた。」
備考	海野さんは憧れの先輩であった。 海野さんと森田さんの関係は、同じクラブ内の先輩－後輩関係（一年海野さんが学年では年上、実際は同じ歳） 海野さんと森田さんは異性であった。 海野さん、森田さんを含んだ集団はクラブ活動も含め、いつも一緒にいることが多かった。		震災当日、森田さんは自宅にいた。早く大学に行く、大切な用事があった。	森田さんは大阪の出身で、震災当時は自宅から通学していた。しかし、よく神戸の友人の家に泊まることもあったという。			

［　］註釈

			III.死後の長期的変化プロセス				
	5．死後　1、2ヵ月間		6．その後長期の関係				
	「2月3日まで」の時期		随時・偶然に			一年の周期毎	現在
	<「アンビバレントな」(頑張らなくては、でも頑張れない)時期>	<自己や自分たち集団を捉え直す>	<海野さんの話の共有>	<励みの対象>	<悲しみ>	<記念の作業の定例化>	<死生観の変化>
	ボランティアを無理を押してする。	クラブの練習をするときに思う。	クラブ、およびその周辺の人と海野さんの会話をする。	クラブ活動の中で思う。	ふとした瞬間に感じる。	決まったとき、決まった場所で	現在の語り
	［訳も分からず落ち込むようなことがなくなってきて］「で、なんかしな、と思ってまあ、些細ではあるけれどボランティアにいくなり、避難所にいる友達を回ったり［中略］そんな些細なことの積み重ねで2月3月はいたのかな。」 「ただ、身体症状にはすごく出たのね。熱が下がらなかったりとか、顔にダーッと吹き出物が出たりとか、体重もすごく減ったし、物が食べれないとかって状態を無理して食べるって状態はすごく続いた。だけど、それとは別に、妙に頭の中で、こんなことばかりしてちゃダメだ、ていう・・・。」	「私も私たちも、海野さんいないけれど頑張ろう、という風に団結していたところがあって［後略］」	「そういうこと［海野さんの話］は、タブーになってるってことは全くなくってもうごっちゃ、だから笑い話にすることもあるし、お父さんとかお母さんとかもよく知ってるから、［中略］わーっと。」 「［海野さんの話をするときは］本当に些細な話が多いと思う。」 「あたしたちの中で彼のそういうタブー視とかをしなくなったのは、そういうお父さんとかお母さんのスタンスが大きかったと思う。」	「海野さんの為に応援がしたいとかさ、海野さんのためにこのクラブを勝たせたいとか、何かそういう機会とか気持ちとかはあったかな。」 「新しい一回生とかが入ってきて、そん時に、あー海野さんなら今こんな風に言ってたんかなー、この子たちにこういう風に激励してたんかなー、と思うと、それをやらなきゃと思ったりとか、そういう本来海野さんがいたらやってただろうな、てことがめっちゃ分かんねん。」	「今とかでも泣くよ。［中略］何かそういう些細なきっかけでという時とかもあるし。」 「うん。［海野さんは］出てくるよ。うん、些細な些細な些細な時間に。」	「17日には、震災にあった時間には必ず［海野さんの］下宿跡にいくので［後略］」 「一年て繰り返しやんか、だからこう同じ時期がめぐってくるわけやんか。［中略］そのたびごとに思い出す機会があるのね。その彼がこういう風にしてたな、ていうのを。」 「そういうことを思い出すきっかけていうのは結構転がってて［中略］全然関係ないじいちゃんの法事があって、そん時にお経を聞いてるでしょう。そしたら、おじいちゃんごめんとか思いながら、海野さんのことしか思い浮かばないんやね。」	「死っていうのが突然で、自分のまわりの重要な人がそういうふうになる可能性もある、っていうことを実感したっていうことと・・・それがいちばん大きい。」
						いちばん初めに海野さんの実家に行ったのは、49日。海野さんの実家には法事に行ったりしている。また毎月花を送っている。	

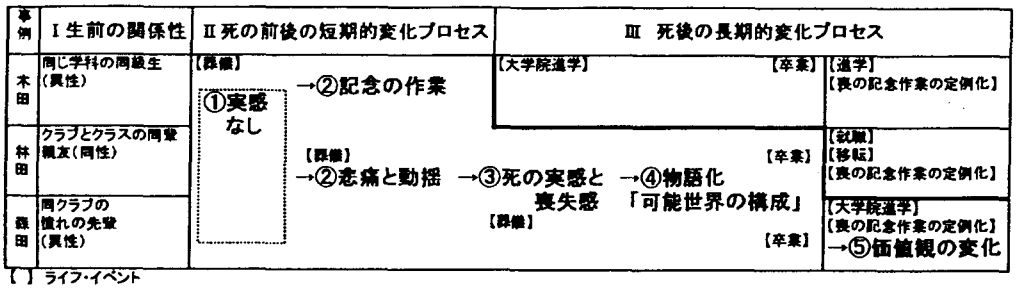

図4 3人の「友人の死の経験」の語りのまとめ

（1）第1相　実感なし（全員）

図4のように、まず、死を知った直後は、3人とも共通して「①実感なし」であり、「信じられなかった」と語った。この最初の相は先行研究とも一致する。また予備調査で調べた追悼文集や手記にも典型パターンとして出現した。

ボウルビィは、パークスなど多くの研究をまとめ、近親者を失ったときの個人の反応の観察から、数週間から数か月、次の4段階をたどることがわかったという。＜1＞無感覚の段階。非常に強烈な苦悩や怒りの爆発に終わることもある。一般に、数時間から1週間連続する。＜2＞喪失した人物を思慕し探し求める段階。怒りと落ち着きのなさ。数か月そしてときには数年つづく。＜3＞混乱と絶望の段階。＜4＞さまざまな程度の再建の段階。

キュブラー・ロスは一人称的死の受容プロセスとして＜1＞否認と隔離、＜2＞怒り、＜3＞取引き、＜4＞抑鬱、＜5＞受容の5段階をあげている。

二人称的死における「無感覚」に比べると、一人称的死における「否認」はより強固な自己防衛であり程度は異なる。しかし、まず最初は、「現実とは思えない」「実感できない」「信じられない」「現実を受け入れられない」という防衛反応が働き、人は危機的変化が起こる以前の状態をつづけようとすると考えられる。

（2）第2相　「悲痛と動揺」（林田、森田さん）
　　「記念の作業」による離脱（木田さん）

林田さん、森田さんは、第2段階において、激しい動揺や痛烈な悲しみを体験した。泣く、身体症状、落ち着きのない行動などが語られたが、ボウルビィやキュブラー・ロスがあげている「怒り」は語られなかった。森田さんは、葬式までの1週間、心理的、身体的に様々な症状が出た。「私自身が食べれなかったし、体が動かなかった」「気がついたら涙がでているし、うわーっ

て思う時もあればふっと静まるときもある、そういうのの繰り返し。」「怒りようがないんやね、ああいう災害に対しては。」「で、自分にできることはなんやろ、と思ったときに、あ、献血しよ、とかさ、とにかくお参りいこ、とか、（略）結構奇異な行動してたかもしれない。」

木田さんは、この２人とは、異なる経過をたどった。木田さんの友人は、クラスの同輩であり多くの仲間の一人にすぎなかった。親友を失った森田さんや、憧れの異性の先輩を失った森田さんとは、悲哀の度合いが相違した。もんもんとした数日があったものの、強い感情は語られず、友人の死そのものは、早期にのりこえられたようである。ただし、大阪の大学院に通いながら今も神戸に住みつづける木田さんにとって、神戸は離れられない土地で、震災体験を自己の経験に組み込む作業そのものは終わっていない。

木田さんは、死後「卒業論文をみんなで仕上げる」という記念の作業を行い卒業した。１か月という長期にわたって、友人仲間で、卒論全体の代理執筆というかなり困難な作業に取り組むことで、友人の死に直面したやりきれなさを具体的な行動に投入し、悲哀を活動に転化し早期に切り離したと思われる。友人と共同で「記念の作品」を仕上げることで、死者への気持の「整理」もかなり「仕上げる」ことができたのであろう。これは、他の友人たちと共同で友人の死という事実を納得し、死者への気持を断念する喪の記念作業として重要な取り組みであったと言える。

南・澤田（1991）は、人生移行という観点から、卒業時のアルバム作りなどの記念の作業をとりあげ、「象徴化（symbolization: Werner&Kaplan, 1963）による距離化」と、「移行対象（transitional object: Winnicott, 1971）による緩衝作用」の２つの概念を用いて説明している。木田さんの卒論完成作業は、特に後者の側面が大きく、喪失という重い現実をポジティブに変える危機的移行の緩衝的役割を果たしたと考えられる。

木田さんは、この作業について、直後のテレビ放映では悲劇の美談とされたけれど、本当は違ったという打ち明け話をユーモアをもって語った。「卒論やってまーす、という嘘ばっかしの映像が」「卒論半ばで亡くなったと、まあ、なんも書いてへんかったですけどね。」彼らは、締め切り近いのにわずか二文字しか書いてなかったフロッピーを見つけて、友人の卒論をみんなで「はじめっからやりましたからね、文献集めからやりましたからね」「全部、自分の卒論より一所懸命やったんちゃうか。」そして、それが、かえって良かったと語った。「その方が良かったというか、生きがいがあったという感じですね。」「卒論をよくやってへんかって良かったと（彼女が卒論をあまりやってなくて良かった）。」現在の語りの文脈において、記念の作業は未完で逝った悲劇の死者のためにやったというより、自分たち（生者）のためによかったという意味づけがなされている。

記念の喪の作業として、死者を追悼する手記や記念集が刊行されることは日常多く行われる。それが「死者」の追悼や記憶を形に残すため「象徴化作用」の方に重きがおかれる場合と、「生者」が危機的事態から抜け出すため「移行のための緩衝作用」の方に重きがおかれる場合とでは、機能が違うのではないかと思われる。前者は、過去の愛着（attachment）を残す方に重点がお

かれ、後者は離脱（detachment)の方に重点があるからである。前者の場合には「過去を忘れない」「記憶を風化させない」ために記念の作業が行われ、後者の場合には「早く過去を忘れ」「新しい世界に移行する」ために記念の作業が行われる。「回復」「適応」のためには後者のほうが望ましいが、「内化」「意味化」のためには前者が望ましいから、離脱が早いほうが良いとはいちがいにいえないだろう。

なお、本研究の一事例では、記念の作業は第2相で行われているが、それぞれの相で、種々の記念の作業がありうると思われる。

（3）第3相　死の実感と喪失感（林田、森田さん）

先に述べたように、林田さん、森田さんは、友人の死を知ってから、激しい動揺や悲痛な悲しみを体験した。そして喪失感とともに友人の死を実感するプロセスをたどった。このプロセスで大きな位置をしめたのは、文化的装置として共同化されている喪の記念作業ともいうべき、「葬儀」である。森田さんの場合をみてみよう。

森田さんは、通夜・葬式で初めて遺体と対面し〈死を実感〉した。「実際にお葬式にいくまでは、何が何だかよくわからなかったけれど、お葬式にいって色々、まあ海野さんにお会いして、で、そっからは変わったんかな。」

また、通夜・葬式でその場に居合わせた人たちと会い「悲しみを共有」したことが大きいと述べている。悲しみが個人的なものではなく、集団的なものでもあることが、死を受けとめる過程で重要だと考えられる。「実際に（話を共有できる人と）会っていろんな人とまず悲しみを共有できる、というのは大きいよね。」

また森田さんは、海野さんの家族の様子を見、その内面を思うことで、〈自己を捉え直し〉、自分自身が前向きに進まなくてはならないと自覚した。「自分よりもっと辛い、例えば親御さんとかね、ご家族の方とかがすごい辛いというのを思うと、前の方に向かって私自身がちゃんと生きなきゃという風に思い始めてからは、そういう抑鬱的な、わけもわからず落ち込んだりということもなくなってきた。」

森田さんの場合、葬儀は、第1に、死者に対面することで死を「実感」する役割を果たした。第2に、悲哀を個人だけではなく他の人々と共に受けとめる「共同化」の働きをした。第3に、自分の悲哀に浸っていたところから、自分よりも重い悲哀の中にある人々をいたわり援助する「支援」の気持が生まれ、前向きに変わる契機になった。

今井（1995)は、死別体験の意義はその体験の深さと密接に関連するといい、手記の分析から「死に顔を見る」「最後のお別れをする」ことの心理的重要性を指摘している。葬送の儀礼は単なる「儀式」ではなく、死を実感し死者と別れる文化的装置であり、共同化された喪の記念作業だといえよう。

ただし、葬儀の意味は、3事例とも異なっていた。図4のように木田さんは第1相の「実感な

し」、林田さんは第2相の「悲痛」、森田さんは第3相の「死の実感」に、葬儀が位置していた。葬儀は、共同化された喪の作業であるが、それが個人のなかで占める位置づけや意味づけや体験の深さは、さまざまである。

森田さんは、葬儀を転機に、訳もなく落ち込むことはなくなったが、それでも身体症状など不安定な時期がつづいた。悲しみとそれにうち勝とうとするアンビバレントな時期で、ボランティアをしたり、避難所にいる友達を回ったり、日常活動も行なった。「ただ、身体症状にはすごくでたのね。熱が下がらなかったりとか、顔にダーッと吹き出物が出たりとか、体重もすごく減ったし、物が食べれないとかって状態を無理して食べるって状態はすごく続いた。だけど、それとは別に、妙に頭の中で、こんなことばかりしてちゃダメだ、ていう……。」

（4）第4相　物語化「可能世界の構成」（林田、森田さん）

第4相では、まだ悲しみや喪失感は繰り返し現れる。しかし、それと併行して、体験が、自己の現在の生活（life)の中へ組み入れられて物語（story)化していく様相がみられる。ここで「物語」とは、「経験に意味を付与する様式」をさす。

ブルーナーは、「いかにして真理は知られるのか」という認識論的な問いと「いかにしてわれわれは経験に意味を付与するようになるのか」という物語論的な問いを対比させ、前者にかかわる論理－実証的思考様式（パラディグマティックな様式）と、後者にかかわる物語の思考様式の二つの思考様式の違いを区別した。後者の物語の思考様式は、今後明確にしていく必要がある。ブルーナーによれば、物語の発話行為の特徴は、仮定法的世界を生み出すことであり、現実の仮定法化（subjunctivizing reality)をなしとげることにある。ここで仮定法とは、「その形式が、想像された（しかも事実ではない）行為や状態を指すために用いられ、したがって希望、命令、勧告、ないしは可能的であったり、仮定法的であったり、予期的であったりするできごとを表すのに使われる、その叙法を指す。」したがって、現実の仮定法化とは、人間の可能性のリアリティを扱うことになる。

本研究において、死者の経験を自己の物語としていくプロセスとして興味深いのは、「もし、……なら」という仮定法が現れてくることである。この仮定法が過去に向かうときには、「もし、あのとき、あそこで……であったら、よかったのに」という後悔と詠嘆の物語になる。しかし、現実行為の文脈で未来に向かう可能世界にひらかれていくときは、「こういう場合に、もし……さんがいたなら、どうするだろう」という仮定法が現れる。そこで死者を現在によみがえらす可能世界が構成され、死者の行動の一部が自己の未来の行動のモデルとなり、自己の内にとりこまれ、自己の行動を変える役割をすると考えられる。

林田さんは、就職活動をしながら卒業までに70単位（卒業要件単位の半分）をとらねばならない緊急事態のなかで、亡くなった浜野さんの要領のよい勉強のしかたを思い出し、過去の彼のやりかたをモデルにし、現在の自己の文脈に「移し」てがんばった。彼は次のように語っている。

「時間がなかったから、もう、彼の60点の勉強、ひたすらやって、奇跡が起きてさあ、70単位取れたのよ、そんときは、もう、感謝する、と思ったねえ、…すごいなあ、と思って、全部『可』ばっかりだったけどね。」「助かったねえ、うん、もう奇跡のようだったよ、嬉しかったね。」「信じられなかったねえ、奇跡のような、おお、(浜野さんが) 助けてくれたなと思って。」

彼は行為の意味づけに、「奇跡」ということばを3回繰り返し、「すごい」「信じられない」「嬉しかった」という心情を述べ、それに「助けてくれた」「感謝する」という語りをつづけている。このような「亡きあの人が助けてくれた」「亡きあの人のおかげ」というような語りは、一般的にも死者を亡くした後に頻繁に現れると考えられる。

成功した行為の原因を自分の努力に帰属させるのではなく、亡き人のほうに帰属させ、「……に助けられた」「……のおかげだ」とみなす語りは何を意味しているのだろうか。ここでは、「死者は過去に切り離され、現在の自己の世界だけで現実が構成される」、離脱とは逆のプロセスが生じたと考えられる。「死者と自己の関係性を含んだ可能世界としての現在」が構成され、その可能世界は、死者によって信じられない奇跡的な力が生みだされるポジティヴな世界であり、感謝をもって意味づけられている。

森田さんにも、林田さんと同様に、モデル化による可能世界の構成がみられ、一回生が入ってきたときなど「海野さんなら、この子たちに、こんな風に激励してたんかな」というように、現在の文脈の中で過去の海野さんのやり方を認識し構成し直している。彼女は「海野さんがいたら、やっていただろうなってことが、めちゃわかんねん (よく解るの)」と言っているが、現在の自己の文脈で「もし海野さんなら……」と仮定することで、「死者」を可能世界にとりこむと同時に、死者の行為の意味をより深く理解するようになったと考えられる。

彼女は「海野さんのために、クラブを勝たせたい」とも語っている。自己のために行為をするのではなく、「亡き人のために……」という未来の行為の目標に「死者」を入れこむやり方も、日常よく行われる語りである。「弔い合戦は強い」といわれるのは、この語り口が、自己だけではなく周囲の人々の気持をも引き込みやすいからであろう。ここでもやはり、「死者と自己の関係性を含んだ可能世界としての現在」が構成され、しかもそれが未来に向かう行為のモチベーションとして機能していることがわかる。

以上、「死者のモデル化」「死者の力への感謝」「死者の行為のより深い理解」「死者のためにという行為の動機づけ」という再構成化の物語が生じていることがわかった。

物語ということばで通常連想されるのは、好き勝手に筋書きを作るという意味であろうが、物語の核にある重要な心理作用は、仮定法に基づく「可能世界」の構成にある。その構成世界では、世界が私 (私たち、生者) だけでは成立せず、想定世界のあなた (死者) を含みこんだ世界となる。その世界の構成は、過去にあった出来事の記憶を再現するプロセスだけではなく、現在の自己の文脈のなかで生み出される創造的な「あるべき、あるはず、あってほしい」世界の構成プロセスからなる。可能世界においては、「あの人」である死者から逆照射されて現状の自己が敬虔

な眼で反省され、「あるべき、あるはず、あってほしい」より良い自己をつくっていこうとする物語が生まれ、自発的な変容が起こりやすい。だからこそ、身近な人の「死」は、それ自体に自己教育力をもち、成熟・発達の契機になるのだと考えられる。

（5）第5相　喪の記念作業の定例化（全員）
価値観の変化（森田さん）

長期的にみると、3人とも「死の現場に行く」「墓参り」「家へ行き親と話をする」など自発的に共同でする喪の記念の作業を定例化して続けている。これは、一周忌、三回忌などに代表される宗教化された喪の記念作業と同様に、「死」の納得に重要な役割を果たしつつ、日常性と区切る心理作用をもつと考えられる。死者を想い出す非日常の時・空間を特別に設定し、定例化することは、死者を日常生活から切り離すとともに、日常生活に無害に組み込んでいく機能を持つ。

喪の記念作業の定例化は、彼らが同世代の友人を忘れず、「死者」を仲間うちに含みこみながら人生を歩んでいこうとするプロセスとも考えられる。今後、彼らがどれだけ長期にわたって、この作業を続けるかわからないが、墓参りなどは集団で死者や青春の想い出を共有する場になるだろう。それと同時に、一種の同窓会の場となり、そのために昔の仲間が集まり互いの消息を語り合う場に変貌するかもしれない。その場合には、「死者」が、彼ら仲間をむすびつけ、生者どうしの交わりを媒介し、彼らの長い人生の歩みを同伴しながら見守る働きをすると考えられる。

この分析では、主に時間軸にそった個人の変化プロセスに焦点を当てたので、震災という社会、歴史的イベントとしての経験の分析については、まだ今後の課題である。また、震災後3年半しか経ていないので、生涯発達的というほど長期的変化は、本研究では調べることができなかったが、それでも森田さんの場合には、身体症状が重かった反面、自己の核心部にかかわる価値観の変化があり、ネガからポジへの変換が顕著にみられた。彼女は、友人の死を通して「いのち」に触れ、自分も例外なくいずれ死ぬのだという事実を自覚し、死の側から生を眺めるようになった。身近な人の「死」に接することは、それ自体に教育機能を持ち、自分の生き方を変えていく契機になると考えられる。彼女は「友人の死の経験」から学んだことを、次のように語っている。

「死っていうのが突然やってくるのを実感したので、自分もその可能性はある、で、月並みな言い方だけど、いつ死ぬかわからないから、一日一日一生懸命っていうのは、実感としてすごく感じた。」「自分の周りの人もいつ死ぬかわからへん状態、だから誠意をもってというか、やっぱりそういうふうにいっぺん実感すると、周りの人は大事にせなって思ったりせん？」

＊本研究は明治生命財団の助成を受け、「健康文化」研究助成論文集に発表したものである。

引用文献

Bowlby, J. 1980 *Attachment and loss Vol. 3, Loss:Sadness and depression.* 黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子（訳） 1981 母子関係の理論Ⅲ 対象喪失. 岩崎学術出版社.

Bruner, J. 1986 *Actual minds, possible worlds.* Harvard university press. 田中一彦（訳） 1998 可能世界の心理. みすず書房.

Freud, S. 1917 Mourning and melancholia. *Standard Edition of the complete psychological works of Sigmund Freud.* Hogarth Press, 14, 243-258.

今井孝太郎 1991 死別体験の意義――「死」の心理と教育（V）龍谷大学論集, 437, 2-20.

Kubler-Ross, E. 1969 On death and dying. 川口正吉（訳） 1971 死ぬ瞬間. 読売新聞社.

Macnab, F. 1989 *Life and loss.* Millennium books. 福原真知子ほか（訳） 1994 喪失の悲しみを越えて. 川島書店.

南博文・澤田英三 1991 記念の作業――危機的移行過程における象徴的行為のはたらき. 広島大学教育学部紀要 第1部. 40, 139-148.

森有正 1978 森有正全集1. 筑摩書房.

Parkes, C.M. 1970 The first year of bereavement. *Psychiatry,* 33, 444-467.

Plath, D.W. 1980 *Long engagements: Maturity in modern Japan.* Stanford University Press. 井上俊・杉野目康子（訳） 1985 日本人の生き方――現代における成熟のドラマ. 岩波書店.

丹下智香子 1995 死生観の展開. 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科, 42, 149-156.

Werner, H. & Kaplan, B. 1963 *Symbol formation.* Wiley. 柿崎祐一（監訳） 1974 シンボルの形成. ミネルヴァ書房.

Winnicott, D.W. 1971 *Playing and reality.* 橋本雅雄（訳） 1979 遊ぶことと現実. 岩崎学術出版社.

やまだようこ 1995a 生涯発達のためのパーソナル・ドキュメント法. 無藤隆・やまだようこ（編） 生涯発達心理学とは何か――理論と方法. 金子書房, 233-245.

やまだようこ1995b 生涯発達心理学をとらえるモデル. 無藤隆・やまだようこ（編） 生涯発達心理学とは何か――理論と方法. 金子書房, 57-92.

やまだようこ（編） 1997a 現場（フィールド）心理学の発想. 新曜社.

やまだようこ 1997b いない母のイメージと人生の物語. 濱口惠俊（編） 世界のなかの日本型システム 国際日本文化研究センター共同研究報告書. 新曜社.

山住勝弘・上野たかね 1997 阪神大震災の体験と総合学習. 大阪教育大学紀要 第V部門, 46(1), 15-37.

柳田邦男 1998 犠牲への手紙. 文藝春秋.

（発達教育分野）